

ティーンズ通信

5・6月は、こどもの日・母の日・父の日と、家族にまつわる日がたくさんあります。いつも近くにいる、あたりまえの存在に思える家族ですが、皆さんは、家族の絆やつながりについて考えたことはありますか？「そんなの照れくさくてできないや」なんて思っている人も、ぜひ本をとおして家族について考えてみてください。

「幸福な食卓」

瀬尾まいこ/著
講談社 Y913

「父さんは今日で父さんを辞めようと思う」ある朝、父はそう宣言し、大学をめざし受験生になった。家を出た母、秀才とうたわれながら大学には行かず農業をする兄、そして中学生の私。普通と少し違う家族を持つ主人公の、温かくて、ちょっぴりせつない物語。

「時をさまようタック」

ナタリー・バビット/著
評論社 Y933

フォスター家のひとり娘ウィニーは、一日中監視されている窮屈な家を出て、森へやってきた。そこで、泉の水を飲む一人の少年と出会う。その少年の家族には、ある大きな秘密が隠されていた。

「日曜日の夕刊」

重松清/著
毎日新聞社 Y913

長い物語を読むのは苦手という人はこんな本はいかがでしょう。日常の些細な出来事を綴った12の短編小説。

家族をつなぐ

「香港の甘い豆腐」

大島真寿美/著
理論社 Y913

父親の顔を知らない彩美は、17歳の夏、母親に突然パスポートを握られ香港に連れていかれた。父親が香港に暮らしているというのだ。最初は反抗していた彩美だったが、自分のルーツである香港の街に少しずつ心を開いていく。観光ではない異文化の生活を感じられる作品。

「ルート225」

藤野千夜/著
理論社 Y913

14歳のエリ子は、一つ年下のダイゴと家に帰る途中、おかしな世界に迷い込んでしまう。そこは現実と少しだけずれたパラレルワールドだった。町も友だちも少しだけ違い、両親は、もう一つの世界で生活しているようなのだ。はたして二人は元の世界に戻れるのだろうか。

「ナゲキバト」

ラリー・バークダル/著
あすなる書房 Y933

ハニバルは交通事故で両親を亡くし、一人暮らしの祖父“ポップ”と暮らすことになった。ポップは時に厳しく、時に優しくハニバルに生きていくために大切なことを教えてくれる。

異文化との出会い

中東と東欧編

新生活も始まり2カ月。慣れ親しんだ家族、友人の他にも、自分とは価値観が違う人との出会いもあると思います。そこで、「異文化との出会い」と題して、特に中東と東欧に関する本を紹介しします。多様な宗教、文化をもつ人が同じ地域に暮らしているが故に、紛争が多いイメージもあり、日本ではなじみが薄いかもしれません。この機会に、これらの遠い世界を学び、自分達との違いや、共通点を探してみてください。

物語・伝記を読む

「ぼくたちの砦」

エリザベス・レアード/著 評論社 Y933

12歳のカリームは、たくさんの夢をもっている。しかし、現実には外出やサッカー等、当たり前前が制限され、時には侮辱や暴力を受け、過酷な生活を送っている。そんな中でも、カリームは友人や兄弟と助け合い、明るく生きていく。イスラエル占領下のパレスチナの子どもの暮らしを描いた物語。

「心の国境」

デボラ・オメル/著 日本図書センター Y929

ユダヤ人の少女のハナは、アラブ人のアブドラーに憧れの気持ちを持つが、話す言葉が違うため、お互い分かりあうこともなく時は過ぎていく。やがて、戦争が始まり、イスラエルの豊かな自然や平穏な生活は破壊されていく。イスラエル出身の著者による平和への祈りがこめられた物語。

歴史・現在を知る

「中東から世界が見える」

酒井啓子/著 岩波書店 Y312

「アラブの春」と呼ばれる民衆運動により、多くのアラブ諸国の独裁政権が崩壊した。しかし、その後もテロや内戦は絶えない。険しい情勢の中、将来を担う若者はどんな社会を目指しているのかという視点で、中東情勢が分かりやすく解説されている。

「ヨーロッパがわかる」

明石和康/著 岩波書店 Y230

古代ギリシャから現代までのヨーロッパの歴史を一冊にまとめた本。EU(欧州連合)の結成を中心に数々の困難を、各国の結びつきを強めることで、克服しようとする政治家の姿が克明に描かれている。

「わたしはマララ」 マララ・ユスフザイ/著

クリスティーナ・ラム/著 学研パブリッシング Y289

女性が教育を受ける権利を訴える活動を続け、タリバンに撃たれたパキスタンの15歳(2012年10月時)の少女マララの自伝。タリバンの台頭により、故郷を追われ、大好きな学校にも行けなくなってしまった。しかし、圧力に屈せず、マララは平和と教育を求めて、声を挙げて戦っていく。

「変身」

フランツ・カフカ/著 角川書店 Y943

ある朝、平凡なサラリーマンのグレゴール・ザムザは自分の姿が巨大な毒虫に変わっていたのを発見する。家族からは、最初は憐れまれるが、やがて邪魔な存在になっていく。欧米文学に大きな影響を与えたチェコの作家・カフカの代表的な作品。

「さよなら妖精」

米沢穂信/著 東京創元社 Y913

4月の強い雨の日、高校生の守屋は、ユーゴスラビアから来たマーヤと出会い、一緒に時を過ごしていく。ユーゴスラビアで内戦が勃発し、マーヤは故郷へ帰っていった。守屋はマーヤの無事を確かめるため、ユーゴスラビアの資料を集め、マーヤと過ごした記憶をたぐりよせていく。

「レネット」

名木田恵子/著 金の星社 Y913

海歌(みか)の父はチェルノブイリ原発事故で、被爆したペラルーシの少年セリョージャを療養させるため、家庭に受け入れることを決意する。短い期間の異国の青年との交流が、海歌と家族にとって、大事なつながりを生みだす。